

# スペインの空を仰いで

**1+1 in Spain**

岡野耕三・又木啓子展

2019.10.12(土) ▶ 11.17(日)

(デジタルアーカイブ)

ごあいさつ

本展は、スペインの空の下、長年美を探求した二人のアーティストを紹介するものです。

岡野耕三は1940年岡山県倉敷市に生まれ、1967年にスペインに渡りました。卓越した色彩感覚と流れるような筆致によって彩られた抽象画を描き、スペインにおいて「クエンカの日本人画家」として名を馳せました。

又木啓子は1952年宮崎県都城市に生まれ、1976年にスペインに渡りました。絵画・版画・陶芸などを学び、宇宙からの光にイメージを受け、多様な表現に挑戦しています。

公立美術館が主催する岡野耕三の作品展は6年ぶりとなります。また、作品制作に切磋琢磨してきた二人の作品が同一会場に並ぶ、初の機会でもあります。

本展が、異なる形で抽象表現を展開する、二人の画業を深く知る機会となれば幸いです。

おわりに、本企画展に作品の提供をはじめ快く御協力をいただきました岡山県立美術館様、倉敷市立美術館様、又木啓子様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和元年10月12日  
高鍋町美術館

## 謝辞

本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品や資料を貸与くださいました下記の美術館、関係機関並びに所蔵家各位、作品調査・文献調査等に際し、ご協力ご助言いただきました皆さまに深く感謝の意を表します。また、お名前は差し控えさせていただきましたが、本展覧会の実現のためにご尽力賜りました方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。

岡山県立美術館  
倉敷市立美術館  
又木 啓子  
都城市立美術館

(50音順、敬称略)

## 凡例

- ・本書は企画展「スペインの空を仰いで 岡野耕三・又木啓子展」(令和元年10月12日～11月17日 高鍋町美術館)の開催に際し出品された作品・資料のうちから、岡野耕三、又木啓子の主な作品・資料について収録している。
- ・作品データは、作品番号、作品名、作者名、制作年、技法、サイズ(縦×横cm)、所蔵者名の順に表記した。
- ・作品名は本展覧会にあたって又木啓子氏が指定したものである。そのため、過去に発表された作品名と一部異なる作品がある。

## 目次

1	ごあいさつ
2	謝辞
	凡例
3	目次
4	函版
1 4	関連イベント
1 5	「岡野耕三・又木啓子作品を展示して見えてきたもの」青井美保
2 4	年譜
2 6	写真提供

図版

1

---

オーロラユニット

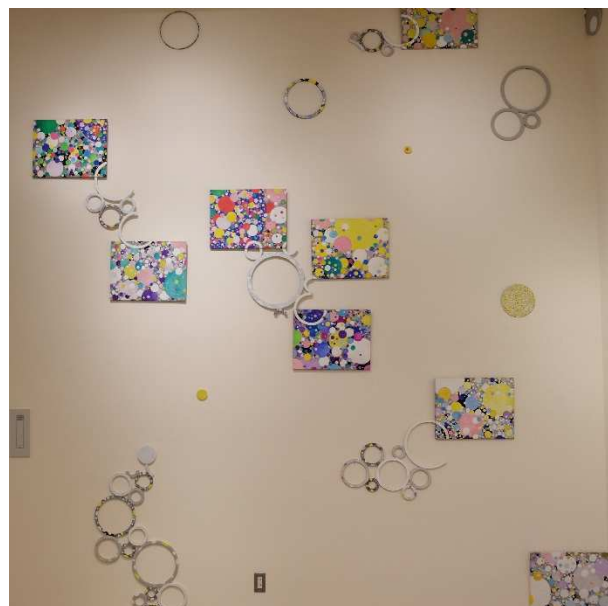
又木啓子

2012年

アクリル画

395×403.5cm

個人蔵



2

---

光の散歩

又木啓子

2019年

インスタレーション

395×1483.5cm

個人蔵



3

---

光の鼓動

又木啓子

2016年

アクリル画

395×700cm

個人蔵



4～7

---

オーロラ I～IV

又木啓子

2012年

油彩画

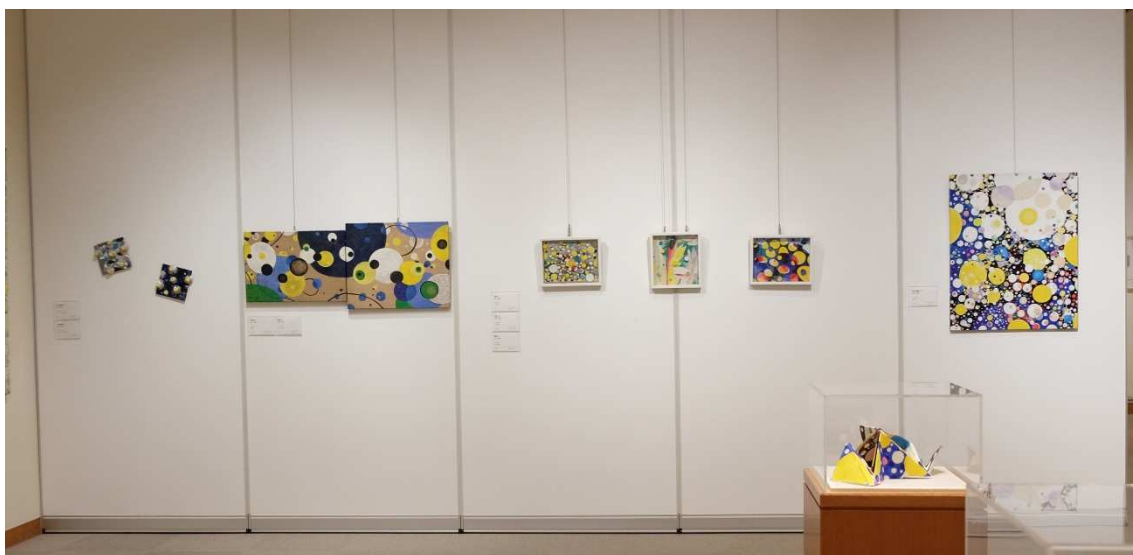
130×648cm

個人蔵



左から順に

- 
8. 9 光の散歩X・光の散歩Y/又木啓子/2019年/コラージュ・アクリル画  
16.8×16.8×4cm/17.2×16.8×4cm/個人蔵
- 10.11 陽光BA/又木啓子/2011年/油彩画  
36.2×55.2cm/38.5×55.2cm/個人蔵
- 12 陽光2/又木啓子/2008年/アクリル画/26.2×26.5cm/個人蔵
- 13 陽光3/又木啓子/2008年/アクリル画/29.6×26.5cm/個人蔵
- 14 陽光1/又木啓子/2008年/アクリル画/26.2×32.3cm/個人蔵
- 15 光の鼓動(1)/又木啓子/2016年/油彩画/81.4×65.3cm/個人蔵



16

---

文字のない本  
又木啓子  
2019年  
アクリル画  
17.7×17.7×10cm  
(変形/全長120cm)  
個人蔵



17

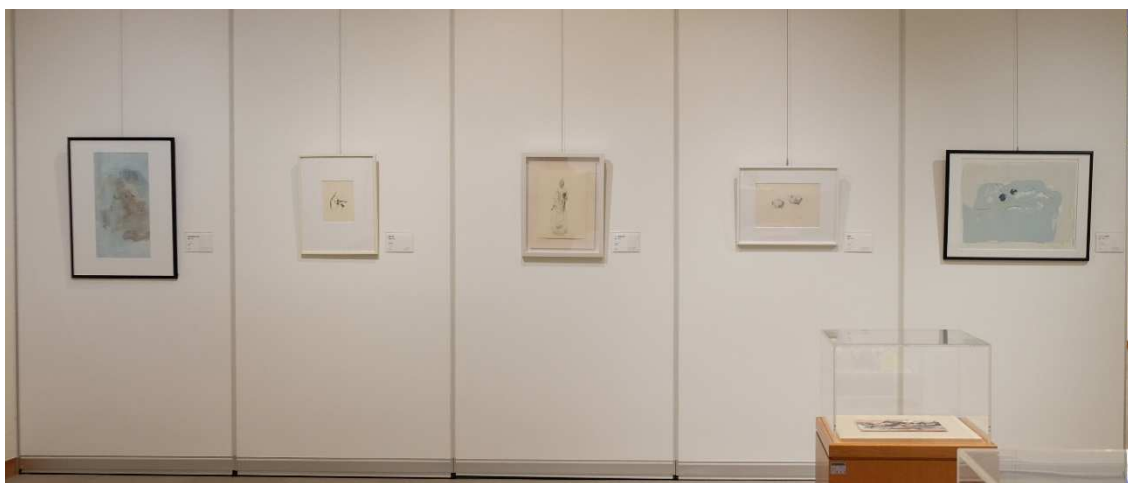
---

宮崎風景  
岡野耕三  
1962年  
コンテ/水彩画  
19×27cm  
個人蔵



右から順に

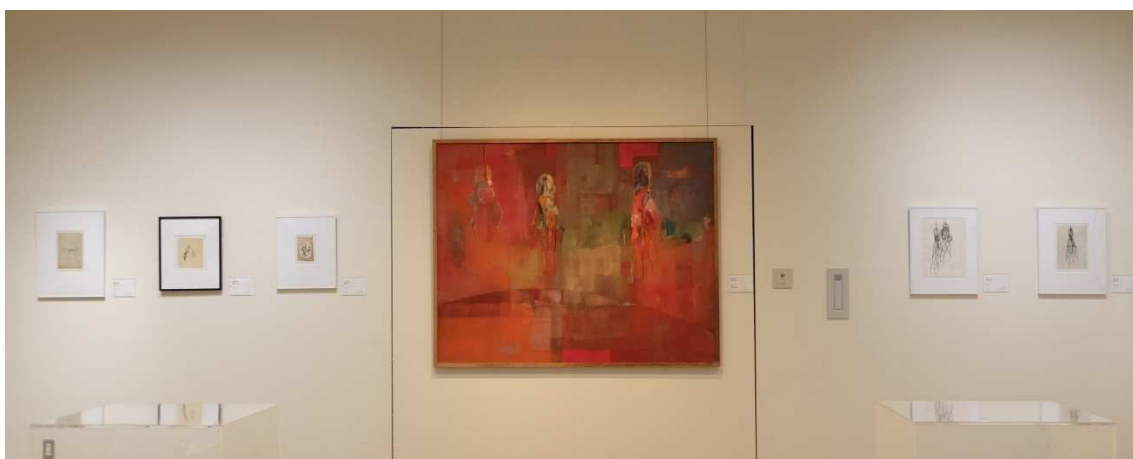
- 
- 18 クエンカ風景/岡野耕三/1976年/シルクスクリーン/57×75cm/個人蔵
  - 19 静物/岡野耕三/1966年/鉛筆画/41×52.5cm/個人蔵
  - 20 十一面観音像/岡野耕三/制作年不明/鉛筆画/54.3×42.8cm/個人蔵
  - 21 題不明/岡野耕三/制作年不明/エッチング/52.5×41cm/個人蔵
  - 22 東洋空間の習作/岡野耕三/1973年/油彩画/75×56.9cm/個人蔵





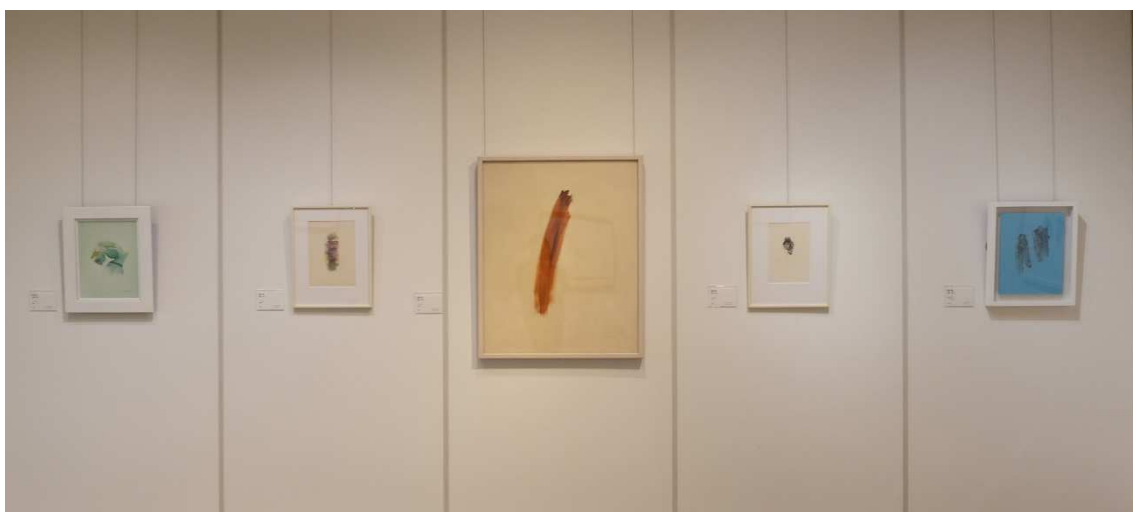
右から順に

- 
- 23 干しだこ/岡野耕三/不明/エッチング/51.3×39.7cm/個人蔵
  - 24 干しだこ/岡野耕三/1964年/デッサン/51.3×39.7cm/個人蔵
  - 25 干しだこ/岡野耕三/1963年/油彩画/134×165cm/岡山県立美術館蔵
  - 26 くるみ/岡野耕三/1975年/エッチング/42.8×35.2cm/個人蔵
  - 27 題不明/岡野耕三/1974年/エッチング/44.1×36.5cm/個人蔵
  - 28 題不明/岡野耕三/1975年/エッチング/51.3×39.7cm/個人蔵



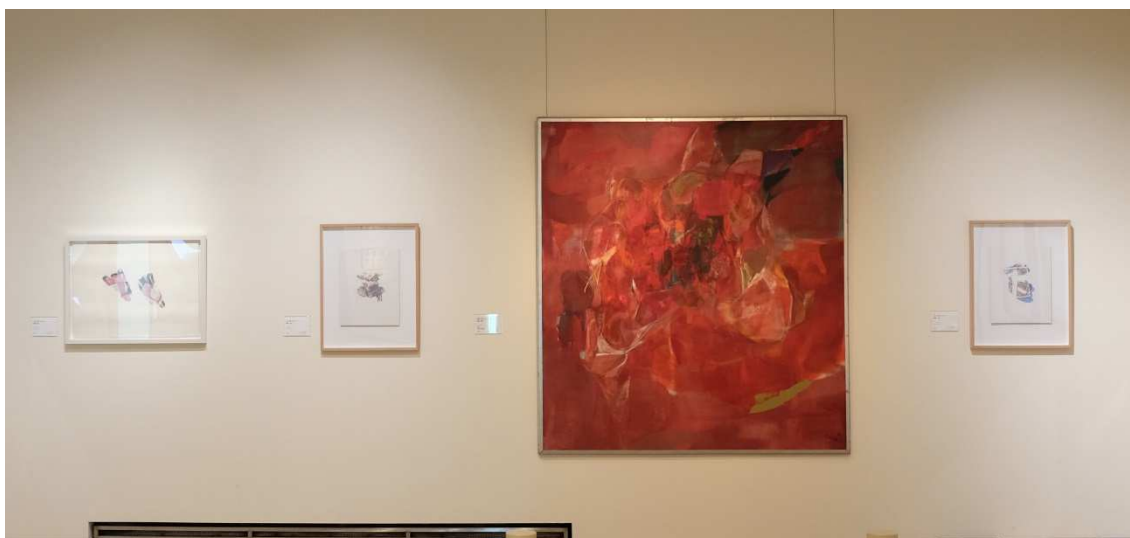
左から順に

- 
- 29 題不明/岡野耕三/1976年/油彩画/55×46cm/個人蔵
  - 30 題不明/岡野耕三/1979年/色鉛筆画/52.6×41.1cm/個人蔵
  - 31 題不明/岡野耕三/1975年/油彩画/103.5×73.8cm/個人蔵
  - 32 題不明/岡野耕三/1972年/ペン画/52.5×41.1cm/個人蔵
  - 33 題不明/岡野耕三/制作年不明/ミクストメディア/52.7×43.4cm/個人蔵



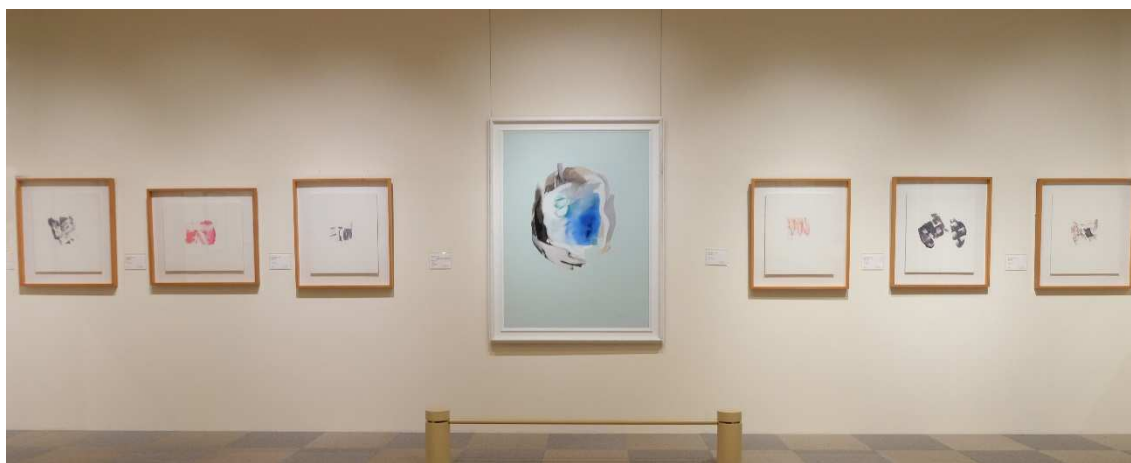
左から順に

- 
- 34 コンポジション/岡野耕三/1990年/ミクストメディア/57.7×75.9  
cm/個人蔵
- 35 コンポジション/岡野耕三/1999年/ミクストメディア/67.6×52.9  
cm/個人蔵
- 36 赤によるコンポジション/岡野耕三/1966年/油彩画/179×164cm/  
倉敷市立美術館蔵
- 37 コンポジション/岡野耕三/1999年/ミクストメディア/67.5×52.8  
cm/個人蔵



左から順に

- 
- 38 コンポジション/岡野耕三/2002年/ミクストメディア/  
72.3×64.4cm/個人蔵
- 39 コンポジション/岡野耕三/2001年/ミクストメディア/  
64.5×72.3cm/個人蔵
- 40 コンポジション/岡野耕三/2002年/ミクストメディア/  
72.3×64.3cm/個人蔵
- 41 もはやひとは抵抗することをやめ/岡野耕三/1971年/油彩画/  
149.2×115.7cm/岡山県立美術館蔵
- 42 コンポジション/岡野耕三/2001年/ミクストメディア/  
72.4×64.3cm/個人蔵
- 43 コンポジション/岡野耕三/2002年/ミクストメディア/  
72.4×64.4cm/個人蔵
- 44 コンポジション/岡野耕三/2002年/ミクストメディア/  
72.3×64.3cm/個人蔵



右側の壁面・左から

- 
- 4 5 コンポジション/岡野耕三/2001年/ミクストメディア  
52.3×67.7cm/個人蔵
- 4 6 oleo sobre lienzo (絶筆)/岡野耕三/制作年不明/油彩画  
100×81cm/個人蔵



4 7

---

月の水  
又木啓子  
製作・スペイン王立タペストリー財団  
2000年  
タペストリー  
88×164cm  
個人蔵



4 8

---

光の散歩 (中庭)  
又木啓子  
2019年  
インスタレーション  
603×811cm  
個人蔵



49

---

TOGARIA星

又木啓子

1993年

オブジェ

44×44×11.5cm

個人蔵



50

---

オーロラ

又木啓子

2012年

アクリル画

139.6×63cm

個人蔵



資料

- ・ スペイン王立タペストリー財団目録 スペイン王立タペストリー財団発行
- ・ 月刊ギャラリー 2011年7月号 株式会社ギャラリーステーション発行
- ・ 収蔵作品選2005 岡山県立美術館発行
- ・ 岡山耕三回顧展 案内状 2012-2013 (クエンカ・岡山・東京)
- ・ 詩画集 K.Okano 2002 画/岡野耕三 詩/小川英晴



1 + 1 in Spain

Uno mas Una en Cuenca

アルベルト・ベルメッホ

又木啓子

2019年

映像

11分26秒

個人蔵



## 関連イベント

### つくろう！“わのわ”

日時：10月13日（日）10：00～17：00

料金：無料 申し込み：不要 会場：キッズルーム



### カンテ・フラメンコ

日時：10月26日（土）16：00～16：30

料金：無料（要観覧料） 申し込み：不要 会場：企画展示室

演奏：田中彰（歌）・田中悦子（ギター）



### みんなで20周年をお祝いしよう！海辺で“わのわ”

日時：11月3日（日）10：00～12：00

料金：無料 申し込み：要予約（電話） 会場：蚊口浜海水浴場



「岡野耕三・又木啓子作品を展示して見えてきたもの」

青井美保

(高鍋町美術館学芸員)

はじめに

岡野耕三は1940年、岡山県児島郡味野（現・岡山県倉敷市）に生まれた。1967年にスペインに渡り、現地において「クエンカの日本人画家」として名を馳せた抽象画家である。又木啓子は1952年、宮崎県都城市に生まれた。1976年にスペインに渡り、絵画・版画・陶芸など多様な表現で宇宙からの光を表現する画家である。1978年ごろ二人は出逢い、その後生涯のパートナーとして制作の場を共にした。

本稿は、二人の作品を同一会場で展示する初の機会となった企画展「スペインの空を仰いで 岡野耕三・又木啓子展」出品作品を中心に、二人の作風の変遷を整理すると共に、互いの作風への影響などについて考察することを目的としている。

## 1. 岡野耕三

本展の岡野耕三作品のなかで最も古い時期に制作された作品は、『宮崎風景』（1962年）であり、作品自体に朱色の鉛筆で「宮崎※海老の '62/8」と明記してある（原文ママ。正しくは『えびの』）。岡野は又木と出会う以前に、既に宮崎を訪れていたのだ。会期終了後に筆者が又木から聞き及んだところによれば、岡野には東京藝術大学時代に小林市出身の同級生がおり、その郷里へ足を運んだらしいとのことであった。筆者はこの同級生が前田利昌である可能性が高いと考えた。年齢や出身校、小磯良平教室出身などの共通点から推測した結果である。実際、前田に確認を取ったところ、岡野が小林市へ訪ねてきたことがあるとの確認をとることができた（2020.2.1 電話による聞き取り/青井）。

力強いコンテの線に、肌色や藍色、鈍い緑色の配色。えびの高原を描いた風景であることは一見して分かるが、その描写は非常に抽象的で、風景のなかに溶け込む自然造形の輪郭線をデフォルメし、抑揚のある力強い線をもって表現している。画面に現れる得体の知れない軟体のような存在感は、特徴的な表現がこのときすでに岡野のなかに生まれていることを物語っている。

『宮崎風景』岡野耕三（1962年・個人蔵）

岡野が宮崎を訪れた2年後、大学生であった彼は執拗に「干しだこ」を描いている。岡野の出身地は岡山県児島郡味野（現・岡山県倉敷市）である。そこから車で10分ほどのところにある下津井地区には、田之浦港・吹上港・下津井港と三つの港があり、現在も当時からの風情を残している。瀬戸内海の冬の風物詩として有名な「干しだこ」は、瀬戸大





橋のたもとで、大きいものでは60cmもあるマダコの足を広げて、寒風に晒されている。干しだこをモチーフとしたのは、郷土を懐かしんでのことだろうか。本展に出品された作品だけ挙げても、岡野はデッサン・エッチング・油彩と、干しだこをモチーフにして多様な表現に挑んでおり、その技法ならではの特色を生かして干しだこの魅力をそれぞれ明確に表現している。

岡野はこの特異な光景「干しだこ」を具象的にフォルムとして掴んだのちに、抽象画へとデフォルメしている。彼はその光景を、乳白色に薄ピンク色の混じった透明感のあるタコの色、ぬめりの感じられる質感、脱力感たっぷりにだらりとしたフォルムで描いた。干



しだこ一つ一つがまるで新種の生物のように神秘的である。画面全体が赤色に染まり、一番左のタコにいたっては今にも空間へと溶け込みそう。そしてタコの向こうには、穏やかな風景が簡略化され描かれている。著者には、港の海面と、その向こうにたたずむ山並みのように見受けられた。

『干しだこ』岡野耕三

(1963年・岡山県立美術館蔵)

『赤によるコンポジション』は岡野が卒業制作として手掛けた作品であり、大橋賞受賞作品でもある。この評価から、東京藝術大学が如何に岡野に対して多大な期待を寄せていたのかが窺い知れる。筆者がこの作品を図版でのみ認識した際には、岡野の全盛期の作品とは表現スタイルが大きく異なっている印象を受けた。彼の作品がもつ共通項のようなものが感じ取れなかったのである。だが、実物との対峙によりその印象は一変した。岡野が後に描く抽象画の世界観は、この時すでに画面上に確立されていたことを、不思議なほどに実感するに至ったのである。

この作品の画面は『干しだこ』と同じ“赤”で構成されている。“赤”へのこだわりについて、岡野は生前こう述べている。

“卒業制作というのは人体を扱うという規定があったからそうただけで、むしろ赤という色彩に思いがあったんです。透明感とか、下地にどういうものを使ったらどう発色するかとか、僕には、赤が一番勉強しやすい色だったんですよ。”(岡野耕三作品集 2000年発行 p.146)



『赤によるコンポジション』岡野耕三

(1966年・倉敷市立美術館蔵)

本展において最後の展示室には、大小さまざまな「コンポジション」を配置した。共通点として、淡い色彩、たっぷり取られた余白、動きのある筆跡などが挙げられる。コンポジションシリーズに移行したのち、岡野の作品からは具象的なモチーフが見当たらなくなった。その作風は岡野が50代の頃から没するまでの約10年に渡り続いた。絶筆とされている『oleo sobre lienzo (絶筆)』も同一であると言えよう。

ここで、この作品タイトルについての補足を加えたい。本作の作品タイトルは実のところ不明である。oleo sobre lienzo とは、スペイン語で“キャンバスに油彩”という意味でしかない。



『oleo sobre lienzo (絶筆)』

岡野耕三

(制作年不明・個人蔵)

つまり『oleo sobre lienzo (絶筆)』とは、“絶筆の油彩画”ということである。今回、それぞれの作品認識のしやすさを目的に、又木啓子氏との話しあいの末、仮に『oleo sobre lienzo (絶筆)』というタイトルで展示した経緯があったことをここに記しておく。

又木によれば、晩年岡野はこの『oleo sobre lienzo (絶筆)』について「完成しているのだ」と言いつつも、サインせずに何年もアトリエに置いて見ていたという。岡野のオランダ人の友人が購入したいと申し出、三度ほど自宅を訪問したが、岡野はサインをするに至らなかった。その友人はいつもがっかりして帰っていった。岡野はこの作品について、「サインをすると自分の手から離れてしまうようだ」と、つぶやいた。

岡野は、渡欧前は具体的なモチーフからインスピレーションを受け制作していたと見受けられるが、渡欧後は自身の内面から生まれたものをベースに、筆の動きをもってとりどりの色を無駄なく画面構成する形へと変化した。渡欧前の作品と比較する“赤”以外の色も自在に配置されるようになり、ある意味では開放的である。

“コンポジション”という言葉は、美術の世界では“絵画の構図”の意で使われている。その作品が瞬間のはかない美しさを描きとめるような作風へと移行していった背景には、それこそが“新しい典型”であると岡野が確信していたためではないかと、筆者は考えるのである。

ここで、“新しい典型”という言葉の根拠となる、岡野の言葉を引用しておきたい。

“ピカソは一生の間にスタイルをいくつも変えている。青の時代とかキュビズムの時代とか…。そして、それが当時の多くの画家たちの先駆けになったわけですが、いまは、それを乗り越えて何かを作るんじゃなくて、一人の絵描きとして横に並べればいいんですよ。新しい典型を作ればいいんだから。”（岡野耕三作品集 2000年発行 p.150）



『もはやひとは抵抗することをやめ』  
岡野耕三  
(1971年・岡山県立美術館蔵)

コンポジションシリーズの多くは余白が白であるが、色のついた作品も少なからず存在している。

1971年に制作された「もはやひとは抵抗することをやめ」は、岡野耕三の画業を語る上で、避けて通れない作品である。核のような何かが宙に浮かぶこの作品の世界観は、“具象”と“抽象”という違いこそあれど、筆者が鑑賞した岡野作品のなかでは倉敷市立美術館が所蔵する『ラ・マンサナ(りんご)』(本展では展示していない)と最も近い。『ラ・マンサナ(りんご)』は林檎を幻想的に描いた具象画である。確かに存在する物質のなかに、混沌としたなにかが内蔵されている。しかもその内蔵物は、外的空間と同一であるかのような感覚さえ抱かせる(本展での展示作品のなかでは、『くるみ』(1975年)が近いタイプの作品である)。一方、『もはやひとは抵抗することをやめ』は、抽出された内

蔵物が宙に浮かんでいるような抽象画である。両者を比較すると、『もはやひとは抵抗することをやめ』はコンポジションシリーズへと向かった岡野の、具象から抽象へのまさに転機たる作品であるように見受けられる。岡野亡きいま筆者にできるのは、描かれた作品や制作年、残された言葉などを頼りに、折々の彼の心境を想像することくらいである。しかし本展の開催をもって、岡野が“新しい典型”に行きつくまでの変遷は、きわめて実験的でありながらも着実な足取りであった様子が浮かび上がった。

## 2. 又木啓子

岡野耕三の追及したものが“新しい典型”だとしたら、又木啓子のそれは“オリジナリティの多様性”だ。本展を開催するにあたり、又木に最初の渡欧の理由を聞いたところ、

「スペインはアーティスト個々の表現を受け入れる風土がある」という言葉が返ってきた。彼女は過去にも、「今世紀各自の原型を創り出した巨匠らの生まれ育った」スペインを知りたいと語っている（MESSAGE p. 44より）。歴史から学ぶでもなく、技術から学ぶでもない。自分が嬉々として自由に表現できる場所—そのようなニュアンスを、著者はその言葉から受け取った。

又木は渡欧後、油彩画・銅版画・陶芸と次々に制作技術を習得しており、本展においてもそのすべてが反映されたインスタレーション作品を展示している。若き日に習得した技術がこのような形で結実するとは、本人も想像だにしていなかったに違いない。

また、又木の作品は、たとえ同じ画材と画風で制作されていたとしても、どれが新作であるのか明らかに分かる。これは、彼女がその時代の時代性とでもいうべき雰囲気を感じ取り、作品に反映してきた証左であろう。

又木は予てより環境デザインにも強い関心を持っている。彼女は北泉橋（都城市・1999年）や散歩道“光”（都城市・2001年）、太陽広場（スペイン・クエンカ県・2006年）、皇子原公園内のTOGARIA星広場（高原町・2016年）などの作品を発表しているが、このような国境を越えた幅広い制作を可能としているのは、限られた条件を最大限に楽しめるという彼女の持つ素質に依るところが大きい。時間の経過とともに存在感が薄れてしまった既存の環境に、又木が手を加えることで新しい息吹が吹き込まれるさまが見て取れる。また、近年彼女は依頼を受け神柱宮祖霊殿瑞光苑（都城市・2011年）や昌竜寺（日之影町・2017年）などといった神社仏閣の内部を手がける機会も増えている。これは、又木の「宇宙からの光」をモチーフとする作品が、人々に魂や祈りを想起させていることを裏付けている。

又木のモチーフには光や宇宙・星・太陽といったものが多く、小さな粒子が大量に蠢くような形を成す。油彩画などの絵画においては点描にも近い繊細な表現でこれらを描写し、また立体造形や建築デザインにおいてはよりデフォルメされた描写のかけらたちが画面のなかを縦横無尽に飛び回る。



『太陽広場』

又木啓子（2006年・スペイン/クエンカ県）

「オーロラ」は又木がライフワークとして取り組み続けているシリーズで、現在も2枚ほど制作を続けている。本展においては2012年に制作された100号の作品を4枚展示した。表現に多様性をもつ又木が、あえて「キャンバスに油彩」という限られた表現を選択したこのシリーズは、彼女の制作の集大成と言えるだろう。赤・白・緑といった小さな粒子が群青の空間のなかで蠢き、膨らみ、流れるような動きをもって画面いっぱいに充満している。筆者はこの「オーロラ」シリーズに対し、最後の1枚と最初の1枚が連結するイメージを抱いている。特有の世界観がメビウスの輪のように繰り返し存在し続けるように見えるその作品からは、“輪廻転生”というキーワードも受け取れた。それは、近年同世代の親しい人々を相次いで亡くし、それをもって自らの死を身近に感じるようになったという又木ならではの空気感であろう。



奥の壁面)『オーロラ I・II・III・IV』又木啓子  
(2012年・個人蔵)  
手前右)『文字のない本』又木啓子  
(2019年・個人蔵)  
手前左)『宮崎風景』岡野耕三  
(1962年・個人蔵)

筆者がこのシリーズは何枚で完成なのかと又木に尋ねたところ、彼女の返答は「無限大に」であった。その言葉に、いっそう完成時の展示空間への想像が膨らむ。作品が鑑賞者の四方を取り囲む、まさに最後の1枚と最初の1枚が連結する展示。“輪廻転生”というキーワードをより際立たせるならば、一般的な箱型の展示室ではなく円形の展示空間も良いかもしれない。「オーロラ」と総称されるその“現象”を、はじまりから終わり、そしてまたはじまりへと巡り鑑賞できるならば、観る人にとってそれは鑑賞という言葉には留まらない「体験」になるだろう。

### 3. 岡野耕三と又木啓子

岡野作品は一般的に「静謐な抽象画」と言われるが、一方で彼が一貫して追求しつづけた“情熱”が確かにその根底に流れている。鑑賞者はその狭間で揺れ、時に無重力空間に投げ込まれたかのような圧倒的な解放感を味わうことが出来るだろう。又木作品は「太陽のようにエネルギーに満ちた作品」と言われるが、一方で死生観のような“秘められたもの”が奥底に潜む。鑑賞者は、薄暗さのなかにあるほのかな光や希望を味わうことになるだろう。このように、“両者ともに第一印象とはまったく異なる奥行き”を、その世界に持ち合わせている。

さて、この“第一印象とはまったく異なる奥行き”をもつ岡野と又木であるが、両者が接点を持ったことによって互いにもたらした影響について記述したい。

岡野は又木の存在によって自身の表現の幅を広げた。又木は、取り巻く環境に呼応するようにオリジナリティの芽を育む力や、多様な画材や技法に意欲的に取り組む姿勢を持っている。制作を長年続けるほど新しい画材や技法との出会いに億劫になる作家が多い中、又木の取り組みは特徴的である。新たな画材や技法への取り組みは、作家にとって自身のイメージに近い表現を見つけるという重要な転換の機となるのは言うまでもない。このような又木の姿勢は、特に岡野の晩年の作品群の表現方法に影響を与えていた。

一方又木は、岡野の作家たるストイックな姿勢に影響を受けた。岡野は、一貫してひとりの作家として新たな表現を生涯追究し続けた。2年ものあいだ、自身の作品と向き合い続け、対話したこともある。このような岡野の姿勢は、又木の作品との向き合い方に影響を与えた。

作家が他者の影響を受けるのは、決してメリットばかりではない。しかし、岡野と又木については、自分が持ち合わせていないものを互いに取り込み、作家としての強度を増すという、思ってもみなかった相乗作用に繋がった。

#### 4. 展示構成

本展の展示構成は、又木との密な打ち合わせによって決定した。ただし、同一会場で岡野、又木両名の作品を展示する初の試みであったため、実際にその空間で二人の作品がどのように共鳴するかは「展示してみてものお楽しみ」であった。

第1展示室をつきあたっての天井近くを中心に、ひとときわ明るいライティングに包まれた巨大空間が出現する。キャンバス・シェイプドキャンバス・和紙・陶板・モビール。多様な表現と多彩な色が混在する空間のはずなのに、その空間は一塊の蠢きとなってまとまりをもつ。一気に感情の沸き立ちを掻き立てる空間となった。

第2展示室の中央には小さな展示台をシンクロするように配置した。展示台の一つには又木による『文字のない本』、もう一つには岡野による『宮崎風景』が展示された。岡野の初期の具象作品群（なかでも『十一面観音像』は意外性があり印象的である）を経て、『干しだこ』『赤のコンポジション』『もはやひとは抵抗することをやめ』『oleo sobre lienzo（絶筆）』の合間の壁面を、静と動を兼ね備えたコンポジションが埋め尽くす展開へと続く。なお、岡野・又木両名の作品が混じり合うこの展示室においては、鑑賞のしやすさに配慮し、又木作品の選定を岡野作品に多少寄り添うような形で行った。

第3展示室には岡野の成熟した表現と言えるコンポジションシリーズを中心に並んだ。中央には生涯における代表作である『もはやひとは抵抗することをやめ』を配置し、その壁面を囲むように、東京藝術大学卒業制作となる『赤によるコンポジション』、向かい合う壁面には、晩年の代表作『oleo sobre lienzo（絶筆）』が第3展示室の中心核となった。この展示室で、本展の静かなる熱気の高まりは最高潮となる。

第3展示室を抜けた回廊には、近年又木に高い評価を与えたタペストリー財団による、

又木啓子オリジナルタペストリーの縮小版を展示した。実際のタペストリーの大きさは5m×2, 75mにも及ぶので、圧巻の迫力であることが想像できる（スペイン王立タペストリー財団所蔵）。

通常は展示スペースとして使用されるケースの少ないパブリックスペースにて展示した又木作品は、あたかもそこに根ざし生息しているかのようにであった。ガラス越しに見える中庭は開館当時から存在し、高鍋の地理が瓦でデザインされている。又木はこのスペースに屋外対応型の作品（コンクリートやプラスチックを素材とした立体作品）を設置し、その瓦のデザインとの見事な融合を成し遂げた。「ちょっとした遊びよ」と茶目っ気たっぷりに言っていた又木の遊び心が十分に伝わってくる空間となった。通路上に設置した立体作品「TOGAR I A星」は、足元に立つと反射して鏡に中庭の空が映り、展示室から出てきた鑑賞者に対する進むべき方向へのアイキャッチ的な存在となった。

また、中庭の対面には城堀を眺めることのできる休憩室があり、両作家の過去資料、クエンカの自宅やアトリエの映像および、ガラス面にレリーフ状のアクリル画作品「オーロラ」を展示した。ガラスの向こうに広がる高鍋ののどかな風景と「オーロラ」がレイヤーのように重なり、風景が色めきたつ。そういえば会期中、朝方の休憩室にだけ起きる現象があった。朝日がガラス面に差し、作品を透過して、休憩室の床面に色の影が映り込んでいた。その様子に、又木作品が時間や太陽などの光の影響を取り込み、美しく反応するものであることを、改めて認識したものである。

最後に、本展の意義について触れたい。

岡野耕三については、近年、その画業のおおよそを捉えることが出来る機会として「残響 岡野耕三回顧展」（岡山県立美術館・2013年）が開催されている。

一方の又木啓子は、「MESSAGE '97 南九州の現代作家たち」（都城市立美術館・1997年）において、10人の現代作家のなかに選出された実績を持つ。

本展は、それぞれの故郷で取り上げられてきた岡野耕三と又木啓子の存在を繋げ、両者を包括的、あるいは多角的に調査研究する一助となることを目的として開催した。

国境を越え愛されるふたりの作家の功績が今後一層認知され、評価されていくことを願い、本稿を閉じることとする。

参考文献

「岡野耕三 KOZO OKANO resonancias」 2012年12月13日発行

発行：クエンカ県・岡野耕三回顧展実行委員会

「岡野耕三作品集」 2000年8月31日発行

発行：「岡野耕三作品集」刊行会

編集：富士印刷出版事業部 印刷：富士印刷株式会社

「MESSAGE'97 南九州の現代作家たち」 1997年2月21日発行

編集・発行 都城市立美術館 制作 株式会社ページファクトリー

「光の鼓動 又木啓子」 2017年 発行：アグアルナ

「都城美術史」 1988年

著者：古垣隆雄 編纂：宮崎日日新聞 発行者：都城市立美術館

印刷・製本：有限会社文昌堂

「昌竜寺（日之影）にふすま絵 33年越しの約束実現」

宮崎日日新聞 2017年5月9日



## 年譜

岡野耕三 Kozo Okano

- 1940年 岡山県倉敷市生まれ
- 1965年 東京芸術大学卒業 大橋賞受賞
- 1967年 東京芸術大学大学院 卒業直前にスペインに渡る  
マドリード県・トレド県を経てクエンカ県へ移住する
- 2003年 クエンカ県にて他界

## 作品所蔵

- 岡山県立美術館（岡山県・岡山市）
- 倉敷市立美術館（岡山県・倉敷市）
- スペイン抽象美術館（スペイン・クエンカ県）
- ヴィジャファメス近代美術館（スペイン・カステリョン県）
- クエンカ県立美術館（スペイン・クエンカ県）
- アントニオ・ペレス財団クエンカ現代美術館（スペイン・クエンカ県）
- 山陽学園短期大学（岡山県・岡山市）
- 岡山県立児島高等学校（岡山県・倉敷市）
- 倉敷市立味野中学校（岡山県・倉敷市）

又木 啓子 Keiko Mataki

- 1952年 宮崎県都城市生まれ  
1976年 女子美術大学芸術学部洋画科卒業  
スペインに渡る  
1981年 スペイン王立サンフェルナンド美術アカデミー  
(現・マドリードコンプルテンセ大学美術学部)  
絵画・油絵科卒業  
1982年 スペイン国立応用美術学校石版画科・銅版画科修了  
スペイン国立陶芸学校 修了

#### その他の主な制作

- 1999年 北泉橋 (都城市)  
2000年 絨毯デザイン 5m×2.75cm  
(スペイン王立タペストリー財団・マドリード県)  
宮崎県ふるさと切手デザイン (日本郵政省)  
2001年 遊歩道 「光」デザイン・制作 (都城市)  
2006年 “太陽広場 (プリンシペ公園内)” デザイン・制作  
(スペイン・クエンカ県)  
都城市民名誉賞・勲章デザイン (都城市)  
2011年 神柱宮祖霊殿瑞光苑 ロビー空間作品 (都城市)  
2016年 宮崎県立美術館企画  
“TOGARIA 星広場” 皇子原公園内 (高原町)  
2017年 襖絵 “光臨” 昌竜寺 (日之影町)

#### 作品所蔵

- スペイン王立タペストリー財団美術館 (スペイン・マドリード県)  
クエンカ県立アントニオ・ペレス財団美術館 (スペイン・クエンカ県)  
クエンカ州立美術館 (スペイン・クエンカ県)  
切手の博物館 (東京都)  
都城市立美術館 (都城市)  
神柱宮祖霊殿瑞光苑 (都城市)  
昌龍寺 (日之影町)

[写真提供]

岡山県立美術館 (cat.no.16,18)

倉敷市立美術館 (cat.no.17)

又木啓子 (cat.no.11,13,17,19)

高鍋町美術館 (cat.no.5-15,20)

「スペインの空を仰いで 岡野耕三・又木啓子展」

展覧会会期 2019年10月12日(土)～11月17日(日)

主 催 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後 援 宮崎日日新聞社・MR T宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

<データアーカイブ>

制 作 高鍋町美術館